

## 地域のなかで生きるアート ～大野アートウェーブでのワークショップ実践～

### 要 旨

(2004 年度生涯学習コース卒業研究最終報告会・発表読み上げ原稿)

アートが地域に与える影響はかねてから注目されていますが、近年、全国の地方自治体ではアーティスト・イン・レジデンスと呼ばれる文化事業が盛んにおこなわれるようになってきました。これはアーティストを地域に招いて一定期間滞在してもらい、創作活動をしてもらうというもので、アーティストという地域社会にとってユニークな人々を、そのなかに入り込ませることによって、文化的で魅力的なまちづくりをおこなおうというものです。

福井県でも、大野市において「大野アートウェーブ」というアーティストインレジデンス事業がおこなわれています。この事業は市民ボランティアで構成される実行委員会が、大野市からの委託を受けて4年前から実施しています。アートウェーブによって地域に新たな交流の輪を広げることを目指し、住み慣れた地域で起こる新しい出来事によって、普段から見慣れている地域を、改めて見つめる機会もつくろうとしています。

平成15年度には、大森先生が大野アートウェーブの招聘作家として参加することになり、私たちはこの事業を直に見学する機会に恵まれました。生涯学習の視点から美術を学ぶ私たちにとってこの事業は大変興味深かったため、「大野アートウェーブ」を題材に「地域の中で生きるアート」を考察することにしました。

研究のあらましは、大野アートウェーブの現状を分析し、見えてきた課題についてそれを改善するための実践的な活動を企画・運営するというものです。その過程を通して、このタイプの事業が最大限の効果を発揮するための方法を、私たちなりに探ります。

論文の本編では、第1章でこれまでの大野アートウェーブ事業の概略を整理しました。次に第2章ではそのアートウェーブについて私たちが分析するなかで見えてきた現状と課題を述べていき、そして第3章ではこの見えてきた課題に対して私たちは何ができるのか、具体的な実践活動を通して考察しました。最後に第4章においてプロジェクト実施後に集めた市民の感想も踏まえつつ、考察をまとめ、提言としました。

今日は論文の第2章から4章までにあたる、現状の分析から、提言の部分まで、かいつまんでではありますが発表していきたいと思えます。

大野アートウェーブの現状については、関係者や市民の声を参考に分析したところ、

様々な課題がみえてきました。

まず、事業の担い手であるアートウェーブ実行委員と招聘作家の様子について気づいた問題点を述べます。アーティストインレジデンスは近年盛んになってきた新しい取り組みです。全国各地に事業による作品が設置されていますが、一般市民に交流が広がっていくことや、地域を見つめ直すこととなると、具体的な活動の方法論はまだ確立していません。アートウェーブの担い手となろうとする人々は、アートと地域についての意識は高く、熱意を持って活動に臨んでいます。しかしアートと地域をつなぐためには何をすればいいのか、自分たちはどういう役割を果たすべきなのか、活動のモデルがないだけにとまどいが先に立つのです。

次に、大野アートウェーブと市民との関係という視点から現状について分析します。事業では制作された作品を地域のなかに設置するのですが、大野市民の方に対するアンケートから、市民にとって作品はほとんど印象に残っておらず、目にしたことがあるとしても、それがどうしてそこに置かれているのか伝わっていないことがわかりました。アートウェーブでつくられた作品は、作家がその地域で感じたことをもとに様々な考察と試行錯誤を重ね、興味深い過程を経た上で完成されたものです。それを感じることができれば作品は人々の心に何らかの影響を与えるはずであり、その影響は大野市民がきちんと受け取るべきものでもあります。しかし創作の課程に接することなく、出来上がった作品を見るだけではこの影響を得ることは難しいでしょう。大野における制作の課程に市民を巻き込み、その関心と共感を得ながら作品を完成させることが大切です。自分が関わった作品なら、市民に好意的に受け入れてもらえるでしょう。

しかしその市民と作家との交流が、実際はなされにくい状況にあることもみえてきました。アンケート結果からは大野市民のほとんどの方がアートウェーブの活動について知らず、地域に浸透していないことがわかっています。また活動自体は知っていたとしても、いつ、どこで、どんなおもしろいことがおこなわれていて、どうすればそれに参加できるのか、といった情報はあまり発信されていないため、現場へ出掛けるタイミングがつかめません。さらに現代美術に触れる機会が少ない人々にとっては、アートというものは難しいものとして敬遠されがちです。市民に広がった活動にするためには、公開制作、いつでもお越し下さい、というふうに市民の参加を待っているだけでなく、事業をおこなう側から積極的に、市民参加のための企画を、それも一般市民が参加しやすく、参加したいと思うようなものを計画することが必要だといえます。

これらの課題を解決するには、何が必要なのでしょうか。大野アートウェーブの効果をもっと最大限に発揮する方法を私たちに模索するため、自分たちの分析を踏まえたプロ

プロジェクトを実施し、そこから答えにつながるものを引き出そうと考えました。

大森先生は私たちのプロジェクトを、自らの招聘作家としての活動〈水の瞳〉プロジェクトと合わせる形でおこなうことを了承して下さい、そして実行委員会の方々もこれを受け入れて下さいました。

大森先生の〈水の瞳〉プロジェクトとは、先生がアートウェーブの招聘作家として「大野の水」をテーマに作品を制作し大野市内で公開した、その一連の過程のことです。まず先生が制作した提灯を15個、湧き水の名所である御清水周辺の家庭に1個ずつ渡し、無地の提灯に「水への思い」を書いてもらいます。そして大野城祭りの日の夜には、御清水の水場屋根にそれらの提灯が設置され、御清水を照らし出すというものです。公開が終わった後の作品は各家庭の持ちものとして、それぞれのお宅に受け渡されます。

私たちはこの〈水の瞳〉プロジェクトに融合するプロジェクトを実施しました。作品公開イベントは去年の8月15日であり、その日に向けて、夏の御清水地区を舞台に、提灯作りワークショップや映像制作などを実施しました。では、プロジェクトの実施について紹介します。

大森先生の提灯は御清水の水場屋根に設置されます。そして公開日である8月15日には、大野城祭りによってたくさんの人々が、お祭りのメイン会場である六間通りに集まるとのことでした。そこで、城祭りに集まった人々を御清水まで案内するために、道しるべとなる提灯を、御清水地区の人々自身の手で作る、というワークショップを企画しました。

ワークショップ会場は御清水の向かい側にある御清水会館という建物で、地区の方々にとってはアクセスしやすい場所です。地区の方々を対象としていることを全面にだし、情報を地区の取りまとめ役の方々による口コミで広げてもらうことにより、効果的に参加者を募ることができました。ワークショップで作品〈水の瞳〉の題材になっているのと同じ提灯を作ることにしたのは、作家や作品に対する興味を引き出すきっかけになると考えたからです。さらに会場では、作家である大森先生に作品の提灯をつくっていただきました。これによって作品制作のプロセスを見学でき、ひとつの場所で同じような作業をすることは、作家と交流しやすい状況をつくれます。またワークショップで作る提灯にはイベントの道しるべとしての役割があり、そのことによって「自分のしたことがこのプロジェクトをつくっている」、つまりアートウェーブに参加している、という実感を得てもらえればと思いました。

この道しるべの提灯には墨流しという、水面に浮かべた絵の具を紙に移す技法で模様をつけてあります。この墨流しに使う水には、御清水から汲んできた水を使用しました。ワークショップは8月中に3回に分けて実施しており、そのうち一回はこの墨流しをす

る回でした。御清水を利用することで、この地域ならではの活動という特徴づけをおこないません。また、ワークショップ形式の企画は参加者同士の交流の楽しみも得られるものです。人々が集まって、みんなで工作のような作業に取り組みながら交流の様子は、とても楽しそうでした。参加者のお話によると、このときに集まった人々とは普段から知り合いではあっても、このように楽しくおしゃべりする機会はあまりなく、私たちのプロジェクトは地区の人々のつながりにも新たな一面を加えることができたのだと思います。

地区の方々とともに作りあげたのは道しるべ提灯だけではありません。大野の水、御清水、今回のプロジェクトなどを扱う映像を計6本制作し、上映しました。さきほどお見せした映像はそのひとつです。映像を作るにあたっては、約3ヵ月の期間をかけて普段御清水に関わる人々を取材しました。映像制作も地区の人々の協力なしにはできないことであり、作品公開イベントにおいて重要なことです。作品の展示は、提灯のみとなります。それを見ただけでは、<水の瞳>プロジェクトや私たちのおこなったプロジェクトの意図がなかなか伝わりません。しかしこのようなことを説明版などの文章で長々と説明しても作品の洗練度を損なうことになってしまい、人々の心に作品のことを良い印象として残すことは難しいでしょう。この映像はそれだけを見ても楽しいものに仕上げ、これを見ると、ここでおこなわれているプロジェクトが地域の人々との関係そのものを大切にしていることが、感覚でわかるようにしました。

映像が完成し、当日上映されたとき、集まった人たちはこの映像の洗練されたスタイルやテンポの良さを楽しんで下さいました。また、自分や自分の家族が映っている場面を見つけて喜んでおられる姿も見られました。

この映像はフォトシネマと呼ばれる映像加工ツールを用いたものです。このような作業は、最近ではパソコンで簡単にできるようになってきており、活動に取り入れやすいと思われます。また、映像制作のための取材や準備活動で、プロジェクトをおこなう側である私たちは繰り返し御清水に足を運びました。このことによって私たちの顔を地区の人々が覚えてくれるようになり、やる気を理解してくれるようになりました。この過程はプロジェクトの情報を広め、共感を高めることにつながっていました。

こうしてプロジェクトは進められ、8月15日にはワークショップによる道しるべ提灯が城祭りのメイン会場から御清水までの街路に取り付けられました。大森先生の作品が御清水を照らし出し、その向かいの御清水会館では取材をもとに私たちが構成した映像を上映しました。大野城祭りという、市民が大勢集まる機会を利用したイベントであったので、たくさんの人々に訪れてもらえました。

この日のみ訪れて下さった人々にも印象に残る参加してもらうため、もうひとつ企画

を用意してありました。訪れてくれた人々の手で小さな紙を一枚一枚貼って行って、その場で大きな提灯を完成させるというものです。紙の貼られていない骨組みだけの大提灯を御清水の湧き出し口の上に設置し、貼り付ける紙には、その人の水への想いや、このイベントを見て感じたことなどを書いてもらいます。この大提灯は、当日来た人にも参加の要素を取り入れることで、見るだけで通り過ぎようとする人たちを引き込む効果がありました。イベントが終了すると、作品の提灯も道しるべの提灯も、無事にそれぞれのお宅にひきとられていきました。

実践プロジェクト終了後の市民に対する質問調査では、いろいろな人と話ができて楽しかった、作品がとてもきれいだった、などの感想が寄せられています。また、地区の方々はプロジェクトを進めるなかで写真を提供してくださったり、飾り付けられた提灯のメンテナンスをしてくださったりと、積極的に参加してくださいました。地区の取りまとめ役の方は、来年も自分たちでこのようなイベントをおこないたいとおっしゃってくださっています。

私たちの実践プロジェクトは御清水の人たちの提灯、御清水の人たちの映像、といった具合に〈水の瞳〉に関わる御清水地区の人々を主役にしたものでした。そうすることで人々の参加を引き出すことに成功し、その場で生まれる新たな交流も楽しんでもらえました。地区の人々との関わりこそを目的としていたので、このプロジェクトは成功だったと思います。

最後に、これまでの活動全体を踏まえた考察を、これからの事業に向けて提言としてまとめたいと思います。

提言のひとつめは、アート関連の事業をおこなうにあたっては、ただ事業をおこなうだけではなく、そこに人々を巻き込むことが大切であり、参加をひきだせるよう工夫された企画が必要だということです。その工夫のポイントとして、まず人々の興味を引く内容であることが挙げられます。めずらしいこと、はでなこと、おもしろいことなど、アートにはそのような要素は必ずあるので、利用できるでしょう。人々に「楽しかった、次もまた」と思ってもらうための要素は他のところにもあります。その場にいる人と交流する楽しさを味わえること、参加者にやりがいをもってもらえ、自分のしたことが意味のあることだと実感してもらえることなどです。そのような気持ちにさせるには、計画的なプログラムが必要です。また地域の人々の参加を促すには、地域にもとからあるコミュニティを活かし、地域の側の人物に協力してもらうことも、大変効果的です。

提言のふたつめは、人々の感性に働きかけ、活動の面白いところを伝達できるよう工夫された広報をすることです。こうしたアート関連の事業を広く市民に伝えるには、従来の説明のように一方的に情報を提示するだけでは不十分です。活動の定着と発展の

ために望ましい広報の例としては、今回使用したような映像や、HPなどが挙げられます。今回の映像は、親しみやすく、かつストーリー性があり、プロジェクトの意図を楽しく感じてもらうことができました。HPはきれいな写真やイラストを載せることができ、活動の進展に合わせた頻繁な更新も簡単です。私たちもこのプロジェクトのホームページを作成していました。また、掲示板などを利用すれば誰もが情報の提供者になることができ、自分も参加できるということで興味を持ってもらうきっかけにもなります。映像もホームページも、最近ではパソコンを利用して初心者にも簡単につくれるようになっているので、取り入れやすいと思われまます。

3 つめの提言は、事業に関わった人々がお互いに影響し合い、共感し合っていく状況を、積極的かつ計画的につくることです。今回のワークショップのような、誰もが気負わずに楽しくアートと触れ合える機会は、地域にとって喜ばしいものです。また作品を作る上で地域の人と触れ合うことは重要なので、これは作家にとっても貴重な体験といえます。そして、ふれあいは市民と作家、お互いにとってこれまでの制作や生活に新鮮味を加えます。こうした変化が起こった地域が、また次の年に新しい感性をもった作家と触れ合うことになれば、より大きな変化が生まれるでしょう。毎年新たな展開があって次に続いていくと分かっているならば、アートに対する意識が下がることもありません。そのためには継続して市民に広めていくことが大切になってきます。このサイクルが生きてきてこそ、地域の中にアートをとり入れる意義がでてくるからです。

また、このような市民を巻き込んだ企画を運営することは、活動の担い手にも影響を与えます。新しい事業において活動のモデルを確立するためには、黙々と取り組むだけでなく、関係者で活動を振り返ってお互いの意見を交換し、発展させていくことが必要です。しかしそれぞれに仕事を持つボランティアの方々や、短期間しかまちに滞在できない作家との間では、このような場は自然に持てるものではありません。目の前の作品設置に比べて後回しにされがちなので、結局おこなわれないままになる可能性があります。ところが市民を迎え入れる活動をするとなれば、事業の担い手としては何をするのがベストなのかを、全員が意識するようになり、お互いの意見を語り合うことにつながると考えられるのです。

以上、提言として述べていることは全て、アートと地域の人々との関係をより深く、意義のあるものにするための意見です。この活動に参加し、アートにふれることによって人々のなかにうまれたものは、それぞれの心のなかに深く根付いていくでしょう。それこそが、地域にアートを生かしていくことの意義だと考えます。